

最初の保坂区長の挨拶では、「自治体の憲法」とも言える基本構想の策定に当たってのこのシンポジウムへの大きな期待を持っていることがのべられた。主なキーワードとしては、「世田谷は落ち着いた緑豊かな住宅地」「100周年に向かつての今後20年を展望する」「新しいコミュニティの形成」「地域と行政とのパートナーシップ」と言ったものだったが、区長が持つ基本構想のイメージには同感できることが多いと思った。

基調講演については70年代以降のコミュニティ政策が箱もの建設中心で住民は動員の対象でしかなかった、都市生活の進展に伴って共通問題を行政の専門処理に委託するようになったという当たりの説明には、内容的には既知ではあるが学者としての観方として納得はできた。特に「公共的領域の意思決定過程に対等なパートナーとして参画するための住民側の力量が問われる」という点は前回の街仲間の勉強会でのポイントでもあり、それをきれいに表現してくれたという気はしている。しかしながら、「住民力」という概念については、グラフを使って住民力の高さ意識、行動との関係を説明はしたものの、それ自体は当然であって意味はないものであった。「住民力」をどのように測定するのかの説明がないままの分析は自分の仮説を立証するだけの自己満足で、実際の住民力アップに向けた提案には繋がるものではなかった。この点は学者の限界と言うことかもしれない。これまでも街づくりの有識者として審議会等に登場する学者を多少は見ているが、実際に自分の住む街のコミュニティに関与しているわけでもなく、机上の理論だけの人が多いように思う。

事例解説として「小径の会」の説明は自分も当初から関わってきたものでもあり身近に感じるもので日常的なコミュニティ活動としては好事例と言える。とはいえ、20年後の世田谷を想定した基本構想策定のためのシンポジウムにおける活動事例としてはちょっと物足りないものであった。無作為抽出で区民委員を公募して基本計画をまとめた新宿の事例を紹介するなど区としてプログラム構成にもっと工夫と知恵が欲しかった。

パネルディスカッションはやや意味不明なものとなった。司会役は基本構想の意義を理解していなかったのではないかと感じた。議事進行は自分のコミュニティとの関わりに関する体験談が中心で、緊急時のために隣近所との付き合いが重要だとか、楽しくないとコミュニティ活動には参加したくないという、当たり前前の話に終始してしまった。近所の人の写真を回覧したらどうかとか、「洗練された近所づきあい」とかの言葉の遊び的なやり取りで時間が過ぎてしまい、街づくりにおける正義とは何か、どのようにコンセンサスを得るのか、人口動態をどう見るのかという会場からの質問がでてきてようやく実質議論ができそうになったが、既に時間は終わりとなっていた。

平日の夜にこういう会合に集まる人たちは素人というよりは街づくりの経験を結構積んだ人たちと想像するが、それにしてはステージの人たちはその場に相応しい議論と言うよりは、受けを狙った話をするが多かったように思う。第1回のシンポであるから最初から固い話は避けたという区の弁解もあるかもしれないが、だとしても時間的に余裕の無い中で無駄なイベントをしてしまったということだけが残る寂しいシンポジウムであった。